

メリイクリスマス

太宰治

青空文庫

東京は、哀^{かな}しい活気を呈していた、とさいしよの書き出しのいちぎよう

行に書きしるすというような事になるのではあるまいか、と思つて東京に舞い戻つて来たのに、私の眼には、何の事も無い相変らずの「東京生活」のごとくに映つた。

私はそれまで一年三箇月間、津軽の生家で暮し、ことしの十一月の中旬に妻子を引き連れてまた東京に移住して来たのであるが、来て見ると、ほとんどまるで二三週間の小旅行から帰つて来たみたいの氣持がした。

「久し振りの東京は、よくも無いし、悪くも無いし、この都会の性格は何も變つて居りません。もちろん形^{けいじか}而下^げの変化はあります

けれども、形而上の氣質に於いて、この都会は相変わらずです。馬鹿は死ななきや、なおらないというような感じですよ。もう少し、変つてくれてもよい、いや、変るべきだとさえ思われました。」

と私は田舎いなかの或るあひとに書いて送り、そうして、私もやつぱり何の変るところも無く、久留米くるめがすり緋の着流しに二重まわしをひっかけて、ぼんやり東京の街々を歩き廻っていた。

十二月のはじめ、私は東京郊外の或る映画館、（というよりは、活動小屋と言ったほうがびつたりするくらいの可愛らしくお粗末な小屋なのであるが）その映画館にはいつて、アメリカの写真を見て、そこから出たのは、もう午後六時頃で、東京の街には夕ゆ霧うぎりが烟けむりのように白く充満して、その霧の中を黒衣の人々がいそ

がしそうに往来し、もう既にまったく師走しわすの巷ちまたの気分であつた。東京の生活は、やっぱり少しも變つていない。

私は本屋にはいって、或る有名なユダヤ人の戯曲集を一冊買い、それをふところに入れて、ふと入口のほうを見ると、若い女のひとが、鳥の飛び立つ一瞬間のような感じで立つて私を見ていた。口を小さくあけているが、まだ言葉を発しない。

吉か凶か。

昔、追いまわした事があるが、今では少しもそのひとを好きでない、そんな女のひとと逢あうのは最大の凶である。そうして私は、そんな女がたくさんあるのだ。いや、そんな女ばかりと云つてよい。

新宿の、あれ、……あれは困る、しかし、あれかな？

「笠井さん。」女のひとはつぶや呟くように私の名を言い、かかと踵をおろしてかす幽かなお辞儀をした。

緑色の帽子をかぶり、帽子の紐をひも顎であご結び、真赤なレンコオトを着ている。見る見るそのひとは若くなって、まるで十二、三の少女になり、私の思い出の中の或る影像とぴったり重つて来た。

「シズエ子ちゃん。」

吉だ。

「出よう、出よう。それとも何か、買いたい雑誌でもあるの？」

「いいえ。アリエルというご本を買いに来ただけだけでも、もう、いいわ。」

私たちは、師走ちかい東京の街に出た。

「大きくなつたね。わからなかつた。」

やっぱり東京だ。こんな事もある。

私は露店から一袋十円の南京豆ナンキンまめを二袋買い、財布さいふをしまつて、

少し考え、また財布を出して、もう一袋買った。むかし私はこの子のために、いつも何やらお土産みやげを買つて、そうして、この子の母のところへ遊びに行つたものだ。

母は、私と同じとしてあつた。そうして、そのひとは、私の思い出の女のひとの中で、いまだしぬけに逢つても、私が恐怖困惑せずまれにすむ極めて稀な、いやいや、唯一、と言つてもいいくらいのひとであつた。それは、なぜであろうか。いま仮りに四つの答

案を提出してみる。そのひとは所謂いわゆる貴族の生れで、美貌びぼうで病身で、と言つてみたところで、そんな条件は、ただキザでうるさいばかりで、れいの「唯一のひと」の資格にはなり得ない。大金持ちの夫と別れて、おちぶれて、わずかの財産で娘と二人でアパート住いして、と説明してみても、私は女の身の上話には少しも興味を持ってないほうで、げんにその大金持ちの夫と別れたのはどんな理由からであるか、わずかの財産とはどんなものだか、まるで何もわかつてやしないのだ。聞いても忘れてしまうのだろう。あんまり女に、からかわれつづけて来たせいか、女からどんな哀れな身の上話を聞かされても、みんないい加減うっその嘘うそのような気がして、一滴の涙も流せなくなっているのだ。つまり私はそのひとが、

生れがいいとか、美人だとか、しだいに落ちぶれて可哀かわいそうだと
か、そんな謂いわば口オマンチツクな条件に依よつて、れいの「唯一
のひと」として扱えらび挙げていたわけでは無かった。答案は次の四
つに尽きる。第一には、綺麗きれい好きな事である。外出から帰ると必
ず玄関で手と足を洗う。落ちぶれたと言つても、さすがに、き
ちんとした二部屋のアパートにいたが、いつも隅すみ々ずみまで拭ふき掃そ
除うじが行きとどき、殊にも台所の器具は清潔であつた。第二には、
そのひとは少しも私に惚ほれていない事であつた。そうして私もま
た、少しもそのひとに惚ほれていないのである。性慾せいよくに就ついての、
あのどぎまぎした、いやらしくめんどうな、思いやりだか自惚うぬぼれ
だか、氣を引いてみるとか、ひとり角力ずもうとか、何が何やら十年一

日どころか千年一日の如き陳腐ちんぷな男女闘争をせずともよかった。私の見たところでは、そのひとは、やはり別れた夫を愛していた。そうして、その夫の妻としての誇を、胸の奥深くにしっかり持っていた。第三には、そのひとが私の身の上に敏感な事であった。私がこの世の事がすべてつまらなくて、たまらなくなっている時に、この頃おさかんのようですね、などと言われるのは味気ないものである。そのひとは、私が遊びに行くと、いつでもその時の私の身の上にびったり合った話をした。いつの時代でも本当の事を言ったら殺されますわね、ヨハネでも、キリストでも、そうしてヨハネなんかには復活さえ無いんですからね、と言った事もあった。日本の生きている作家に就いては一言も言った事が無かつ

た。第四には、これが最も重大なところかも知れないが、そのひとのアパートには、いつも酒が豊富に在った事である。私は別に自分を吝りんしよく嗇しよくだとも思っていないが、しかし、どこの酒場にも借金が溜ゆるつて憂鬱ゆううつな時には、いきおいたで飲ませるところへ足が向くのである。戦争が永くつづいて、日本にだんだん酒が乏しくなつても、そのひとのアパートを訪れると、必ず何か飲み物があった。私はそのひとのお嬢さんにつまらぬ物をお土産として持つて行つて、そうして、泥酔でいすいするまで飲んで来るのである。以上の四つが、なぜそのひとが私にとって、れいの「唯一のひと」であるかという設問の答案なのであるが、それがすなわちお前たち二人の恋愛の形式だったのではないか、と問いつめられると、

私は、間抜け顔して、そうかも知れぬ、と答えるより他は無い。

男女間の親和は全部恋愛であるとするなら、私たちの場合も、そりやそうかも知れないけれど、しかし私は、そのひとに就いて煩ほん悶もんした事は一度も無いし、またそのひとも、芝居がかったややこしい事はきらっていた。

「お母さんは？ 変りないかね。」

「ええ。」

「病氣しないかね。」

「ええ。」

「やつぱり、シズエ子ちゃんと二人でいるの？」

「ええ。」

「お家は、ちかいの？」

「でも、とつても、きたないところよ。」

「かまわない。さっそくこれから訪問しよう。そうしてお母さんを引っぱり出して、どこかその辺の料理屋で大いに飲もう。」

「ええ。」

女は、次第に元気が無くなるように見えた。そうして歩一歩、おとなびて行くように見えた。この子は、母の十八の時の子だというから、母は私と同じとしの三十八、とすると、……。

私は自惚れた。母に嫉妬しつとするという事も、あるに違いない。私は話頭を転じた。

「アリエル？」

「それが不思議なのよ。」案にたがわず、いきいきして来る。

「もうせんにね、あたしが女学校へあがったばかりの頃、笠井さんがアパートに遊びにいらして、夏だったわ、お母さんのお話の中にしきりにアリエル、アリエルという言葉が出て来て、あたし何の事かわからなかったけど、妙に忘れられなくて、「急におしやべりがつまらなくなつたみたい、ふうつと語尾を薄くして、それつきり黙ってしまった、しばらく歩いてから、切つて捨てるように、「あれは本の名だったのね。」」

私はいよいよ自惚れた。たしかだと思つた。母は私に惚れてはいなかつたし、私もまた母に色情を感じた事は無かつたが、しかし、この娘とでは、或^{ある}いは、と思つた。

母はおちぶれても、おいしいものを食べなければ生きて行かないというたちのひとだったので、対米英戦のはじまる前に、早くも広島辺のおいしいものたくさんある土地へ娘と一緒に疎開し、疎開した直後に私は母から絵葉書の短いたよりをもらったが、当時の私の生活は苦しく、疎開してのんびりしている人に返事など書く気もせずそのままにしているうちに、私の環境もどんどん変り、とうとう五年間、その母子との消息が絶えていたのだ。

そうして今夜、五年振りに、しかも全く思いがけなく私と逢つて、母のよろこびと子のよろこびと、どちらのほうが大きいのだろう。私にはなぜだか、この子の喜びのほうが母の喜びよりも純粹で深いもののように思われた。果してそうならば、私もいまか

ら自分の所属を分明にして置く必要がある。母と子とに等分に属するなどは不可能な事である。今夜から私は、母を裏切つて、この子の仲間になろう。たとい母から、いやな顔をされたつてかまわない。こいを、しちやつたんだから。

「いつ、こつちへ来たの？」と私はきく。

「十月、去年の。」

「なあんだ、戦争が終つてすぐじゃないか。もつとも、シズエ子ちゃんのお母さんみたいな、あんなわがまま者には、とても永く田舎で辛抱しんぼうできねえだろうが。」

私は、やくざな口調になつて、母の悪口を言つた。娘の歡心をかわんがためである。女は、いや、人間は、親子でも互いに張り

合っているものだ。

しかし、娘は笑わなかった。けなしても、ほめても、母の事を言い出すのは禁物の如くに見えた。ひどい嫉妬だ、と私はひとり合点がてんした。

「よく逢えたね。」私は、すかさず話題を転ずる。「時間をきめてあの本屋で待ち合せていたようなものだ。」

「本当にねえ。」と、こんどは私の甘い感慨に難なく誘われた。私は調子に乗り、

「映画を見て時間をつぶして、約束の時間のちょうど五分前にあの本屋へ行つて、……」

「映画を？」

「そう、たまには見るんだ。サアカスの綱渡りの映画だったが、芸人が芸人に扮^{ふん}すると、うまいね。どんな下手^{へた}な役者でも、芸人に扮すると、うめえ味を出しやがる。根が、芸人なのだからね。

芸人の悲しさが、無意識のうちに、にじみ出るのだね。」

恋人同士の話題は、やはり映画に限るようだ。いやにびったりするものだ。

「あれは、あたしも、見たわ。」

「逢ったとたん、二人のあいだに波が、ざあつと来て、またわかれわかれになるね。あそこも、うめえな。あんな事で、また永遠にわかれわかれになるということも、人生には、あるのだからね。」

これくらい甘い事も平気で言えるようでなくっちゃ、若い女のひとの恋人にはなれない。

「僕があのもう一分いっぶんまえに本屋から出て、それから、あなたがあの本屋へはいつて来たら、僕たちは永遠に、いや少くとも十年間は、逢えなかつたのだ。」

私は今宵こよいの邂逅かいこうを出来るだけ口オマンチあおツクに煽あおるように努めた。

路は狭く暗く、おまけにぬかるみなどもあつて、私たちは二人ならんで歩く事が出来なくなつた。女が先になつて、私は二重まわしのポケットに両手をつつ込んでその後その後に続き、

「もう半丁？ 一丁？」とたずねる。

「あの、あたし、一丁ってどれくらいだか、わからないの。」

私も実は同様、距離の測量に於いては不能者なのである。しかし、恋愛に阿呆感あほうは禁物である。私は、科学者の如く澄まして、

「百メートルはあるか。」と言った。

「さあ。」

「メートルならば、実感があるだろう。百メートルは、半丁だ。」
と教えて、何だか不安で、ひそかに暗算してみたら、百メートルは約一丁であった。しかし、私は訂正しなかった。恋愛に滑稽こっけい感かんは禁物である。

「でも、もうすぐ、そこですわ。」

バラックの、ひどいアパートであった。薄暗い廊下をとおり、

五つか六つ目の左側の部屋のドアに、陣場という貴族の苗字が記しるされてある。

「陣場さん！」と私は大声で、部屋の中に呼びかけた。

はい、とたしかに答えが聞えた。つづいて、ドアのすりガラスに、何か影が動いた。

「やあ、いる、いる。」と私は言った。

娘は棒立ちになり、顔に血の気を失い、下唇を醜くゆがめたと
思うと、いきなり泣き出した。

母は広島空襲で死んだというのである。死ぬる間際まぎわのうわごとの中に、笠井さんの名も出たという。

娘はひとり東京へ帰り、母方の親しんせき戚の進歩党代議士、そのひ

との法律事務所に勤めているのだという。

母が死んだという事を、言いそびれて、どうしたらいいか、わからなくて、とにかくここまで案内して来たのだという。

私が母の事を言い出せば、シズエ子ちゃんが急に沈むのも、それ故であつた。嫉妬でも、恋でも無かつた。

私たちは部屋にはいらず、そのまま引返して、駅の近くの盛り場に来た。

母は、うなぎが好きであつた。

私たちは、うなぎ屋の屋台の、のれんをくぐつた。

「いらつしやいます。」

客は、立ちんぼの客は私たち二人だけで、屋台の奥に腰かけて

飲んでゐる紳士がひとり。

「大串おおぐしがよござんすか、小串が？」

「小串を。三人前。」

「へえ、承知しました。」

その若い主人は、江戸っ子らしく見えた。ばたばたと威勢よく七輪しちりんをあおぐ。

「お皿を、三人、べつべつにしてくれ。」

「へえ。もうひとかたは？ あとで？」

「三人いるじゃないか。」私は笑わずに言った。

「へ？」

「このひとと、僕とのあいだに、もうひとり、心配そうな顔をし

たべつぴんさんが、いるじゃねえか。」こんどは私も少し笑つて言つた。

若い主人は、私の言葉を何と解したのか、

「や、かなわねえ。」

と言つて笑い、鉢はちまき巻の結び目のところあたりへ片手をやつた。

「これ、あるか。」私は左手で飲む真似まねをして見せた。

「極上がございます。いや、それでもねえか。」

「コップで三つ。」と私は言つた。

小串の皿が三枚、私たちの前に並べられた。私たちは、まんなかの皿はそのままにして、両端の皿にそれぞれ箸はしをつけた。やがてなみなみと酒が充たされたコップも三つ、並べられた。

私は端のコップをとって、ぐいと飲み、

「すけてやろうね。」

と、シズエ子ちゃんにだけ聞えるくらいの小さい声で言つて、母のコップをとつて、ぐいと飲み、ふところから先刻買った南京豆の袋を三つ取り出し、

「今夜は、僕はこれから少し飲むからね、豆でもかじりながら付き合つてくれ。」と、やはり小声で言つた。

シズエ子ちゃんは首肯うなずき、それつきり私たちは一言も、何も、言わなかつた。

私は黙々として四はい五はいと飲みつづけているうちに、屋台の奥の紳士が、うなぎ屋の主人を相手に、やたらと騒ぎはじめた。

実につまらない、不思議なくらいに下手くそな、まるつきりセン
スの無い冗談を言い、そうしてご本人が最も面白そうに笑い、主
人もお付き合いに笑い、「トカナントカイツチャテネ、ソレデス
カラネエ、ポオツトシチャテネエ、リンゴ可愛イヤ、氣持ガワカ
ルトヤツチャテネエ、ワハハハ、アイツ頭ガイイカラネエ、東京
駅ハオレノ家ダト言ツチャテネエ、マイツチャテネエ、オレノ妾ようたく
宅ハ丸ビルダト言ツタラ、コンドハ向ウガマイツチャテネエ、
……」という工合ぐあいの何一つ面白くも、可笑おかしくもない冗談がい
つまでも、ペラペラと続き、私は日本の酔客のユウモア感覚の欠
如に、いまさらながらうんざりして、どんなにその紳士と主人が
笑い合っても、こちらは、にこりともせず酒を飲み、屋台の傍を

とおる師走ちかい人の流れを、ぼんやり見ているばかりなのである。

紳士は、ふいと私の視線をたどって、そうして、私と同様にしばらく屋台の外の人の流れを眺め、だしぬけに大声で、

「ハロー、メリイ、クリスマアス。」

と叫んだ。アメリカの兵士が歩いているのだ。

何というわけもなく、私は紳士のその諧かぎやくにだけは噴ふき出した。

呼びかけられた兵士は、とんでもないというような顔をして首を振り、大股おおまたで歩み去る。

「この、うなぎも食べちやおうか。」

私はまんなかに取り残されてあるうなぎの皿に箸をつける。

「ええ。」

「半分ずつ。」

東京は相変わらず。以前と少しも変わらない。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：石川友子

2000年4月19日公開

2005年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

メリイクリスマス

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>